

学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2025.2.17 vol.

24



おもちつき 1977 (昭和52) 年12月8日
1963 (昭和38) 年に再開園した幼稚園。1971年12月8日に初めて開催されたおもちつきは、現在まで途切れることなく続いている(ただし、2020～2022年はコロナ禍により力士不在での開催となった)。力士による餅つきに始まり、餅つきを実際に体験(年長組)、出来上がったお餅を皆で丸めておいしくいただく。園児にとって大切な思い出となる年中行事のひとつである。(学習院アーカイブズ蔵)

Contents

アーカイブズは役に立っているか？ 学校法人東海大学 学園史資料センター 学園史編纂員	椿田 卓士	2
「十二月八日」の迎え方 学習院アーカイブズ	桑尾光太郎	4
引き継がれた知のバトン～南極観測隊を支えたひと 学習院アーカイブズ	小根山美鈴	6
主な活動 (2024年7月～2025年1月)		8



アーカイブズは役に立っているか？



学校法人東海大学 学園史資料センター 学園史編纂員 椿田 卓士

大学アーカイブズに限らず、史資料保存機関において資料を収集する契機が突然やってくることは珍しくない。通常の業務とは異なる、資料の調査や収集といったミッションが発生することは往々にしてある。

筆者が所属する東海大学学園史資料センターにおいても、2003年の開設以降21年間のあゆみの中で、学園組織の統廃合はもとより、個人レベルでも様々な資料の受け入れ業務を進めてきた。と同時に、学園アーカイブズとして内外に役立つ組織になり得るのか否かについても、日々模索を続けていた。

本稿では、そうした日々の業務の中で、昨今当センターがアーカイブズとして取り組んだ（苦慮した？）いくつかの出来事を紹介したい。

コロナ禍における対応

先般全国的に猛威をふるった新型コロナウイルスの蔓延は、教育機関である大学にも様々な影響をもたらした。学校法人東海大学（以下本学）の各教育機関においても例外ではなく、かかる非常事態に様々な感染対策に迫られた。本学が如何に取り組み対応したのか、その動向をつぶさに記録収集しておくことは、学園史を語る上で、また大学アーカイブズの役割として重要な作業といえるだろう。

本学では、2020年2月に理事長を本部長とする「新型コロナウイルス感染症中央対策本部」を設置した。以降、各キャンパスや教育機関ごとに学生や教職員に向けて、勤務・授業等の諸活動から入構体制・感染対策や危機管理等についての通知が、連日のように発信・発令されていた。

当センターが所在する本学湘南キャンパスも、緊急事態宣言発令をうけて、2020年4月より入構禁止となった。当センターにおいてもスタッフは急遽在宅勤務体制に移行したが、センター自体はスタッフ1～2名が出勤して開室していた。

しかしながら、出勤できないことで現場での資料整理作業も当然滞ることになった上に、突然在宅勤務となった十数名のスタッフの業務を如何に準備設定するか、という業務上の現実的かつ切実な問題に対応しなければならなくなった。

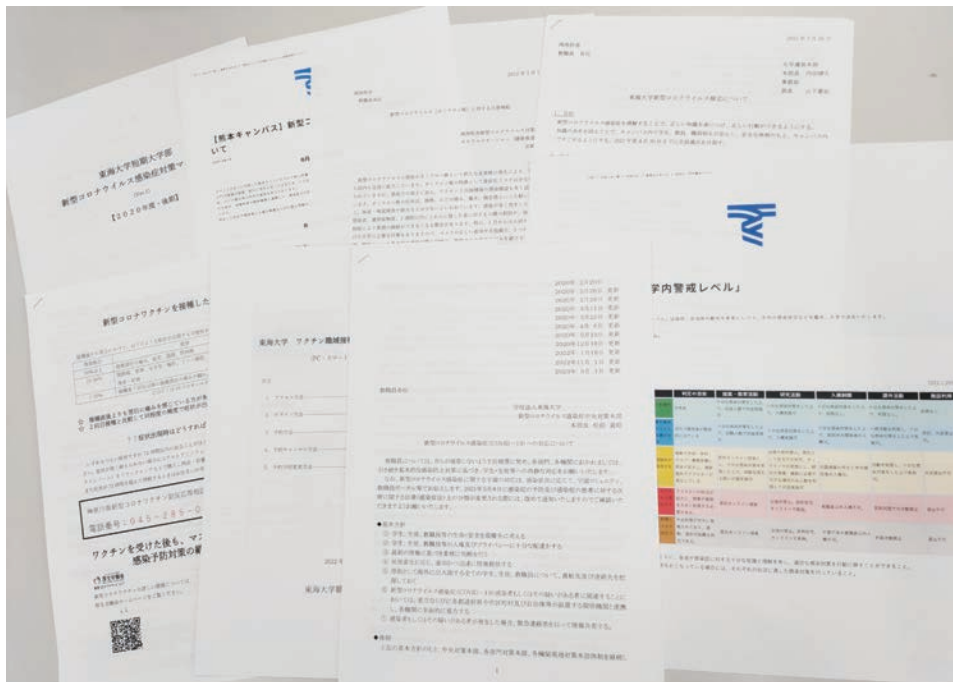
このような状況下で、在宅勤務でも可能な業務の一つとして試みたのが、本学公式サイトや教職員サイトに日々アップされる、前述したコロナ禍における各通知文書等の収集であった（この種の文書は、配信後一定期間で削除されるものが多い）。

全国に広がる大学8キャンパス（当時）の他、各初等中等教育機関から発せられる通知、対応マニュアルなど多種多様であったが、新型コロナウイルス感染対策に関わるデータ等、目についたアップデータを片端からダウンロードして収集した。抽出に漏れたものも多々あったであろうし、全部を網羅できたとは言えないが、それでもコロナ禍で在宅勤務を強いられた約3年間で数百点のデータを収集することができた。

コロナ禍という未曾有の経験の中で本学が如何に対応したかについては、来たる2042年に迎える建学百周年の年史編纂において、章節単位で取り扱われるレベルの重要なトピックの一つになると思われる。その意味で、この収集資料がその時に必要な記録資料の一助となるであろうことを密かに期待している。

改組改編に対応

本学では、建学80周年にあたる2022年4月に、全学的な改組改編構想である「日本まるごと学び改革実行プロジェクト」を打ち出した。これは、建学75周年を機に本学が百周年に向けて策定した「学園マスタープラン」に基づいた中期目標に則ったものである。本学建学以来の理念を継承しつつ、超少子高齢化やAI化の進化、グローバル化といった諸問題



収集した文書の一部（コロナ禍における対応）

に対応すること、そして新たな人材育成と社会や地域の信頼と期待に応えることを主眼としたプランである。

前述したプロジェクトは、具体的には全国のキャンパスや校舎、学部の再編成を目標とする大がかりな改革であり、それに先立つ2021年4月には全学的な事務組織の改組改編も行われた。

これら一連の動きは、いずれもコロナ禍真っ最中に実施されたものであったが、当然、というべきか当センターもそれに伴って発生した資料の移管受け入れに、図らずも対応奔走することになった。

具体的には、改組改編に伴う組織変更や引越移転に伴い、各部署からこの機に大量の資料が発生、移管先として当センターに受け入れの依頼が集中したのである。数量的には、トータル（湘南校舎のみ）で段ボール箱数百箱に及んでおり、現在も受け入れを継続中である。

実際の所、要は新部署のスペースに、旧部署で保管していた物が収納しきれないので当センターに移管委譲したい、という物理的な事情が背景にあったようである。ただ、皮肉なのは、各部署で後日文書の調査確認の必要が出てきた時は、手元に資料が無いためセンターに問い合わせが来るケースが多くなった、という点である。

こうした動きについては、もともとプロジェクト自体がコロナ禍以前から公表されていたこともあり、いずれは発生した資料の受け入れ先を当セン

ターが担うことになるであろうこと自体は前もって予測はしていたし、これもアーカイブズの役目の一つでもあると認識してはいたが、実際には想定を遙かに超えた量となったため、保管スペースにも窮する事態となって現在も保管に苦慮しているところである。

なお、現在当センターではこの改組改編が何故、どのような過程を経て実施されたのか、についての関連資料についても調査を進めている。

以上、当センターにおける直近の動きについて述べたのであるが、その間にも2短期大学閉学（2022年）、1付属病院閉院（2023年）といった大きな動きもあり、こちらから現地に赴いて資料の調査収集に対応したことも付け加えておく。

大学アーカイブズが果たすべき役割とは何か、どんな資料をどのように収集すればいいのか。はたまた当センターの対応はこれでよかったのか。こうした点については、当センター発足以来、いまだに筆者自身答えが見いだせないのが実情である。加えて、資料収蔵スペースの不足など問題は山積しているが、今後も将来に向けた「役に立つ」アーカイブズの構築に邁進していきたい。

最後になりましたが、小稿執筆の機会を与えて頂いた学習院アーカイブズ様に対しまして、記して感謝の意を表す次第です。

「十二月八日」の迎え方

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

1. 開戦直後の記録

1941（昭和16）年12月8日、日本軍はハワイ真珠湾への空襲を開始し、米英両国に対して宣戦を布告した。開戦がどのように受け止められたか、学習院アーカイブズに残される資料から探してみたい。まず、明治期から庶務課で書き継がれてきた「日誌」（昭和16年）には、山梨勝之進院長の動向が記されている。

- 十二月八日 月 晴
- 一、院長 零時五十分出院
 - 一、米英二対シ午前十一時
宣戦大詔渙発セラル
 - 一、院長午後二時四十分宮内省へ
- 十二月九日 火 曇後雨
- 一、院長初等科より海軍省へ 午後三時半出院
 - 一、事務官午前九時十分初等科午後宮内省
- 十二月十日 水 雨後晴
- 一、院長午前十一時初等科より出院
 - 一、午前十一時四十分正堂ニ於テ全学生ニ講話アリ



初等科で講話を行う山梨院長（『小ざくら』31号）

山梨は1939（昭和14）年の院長就任以来、目白、四谷の初等科、宮内省を頻繁に往来しており、12月9日には初等科で生徒に講話を行った後に海軍省を訪ねている。山梨は海軍大将なので戦況の情報を得ていたかもしれない。初等科で山梨が語った内容の一部について、2年生の生徒が初等科の文集『小ざくら』に記している。

九日ぼくたちは正堂へはいつて院長閣下から戦

争のお話をおききした。「日本軍は昨日グアム島をせんりやうした。その島は敵の潜水艦やひかうきの停車場である。その島をせんりやうしてしまふと敵が攻めて来るのにつがふがわるく、はんたいにわが軍の停車場となる。」とおつしやつた。（『小ざくら』31号 1942年3月）

また、教務部が作成した「日誌 昭和十六年四月」には、12月8日に関口雷三中等科長・山梨院長から訓示が行われたことが記されている。その内容がわかる資料は、残念ながら発見することができなかった。

- 十二月八日 月曜日
英米ト戦線布告セラレタリ
午前八時三十分中等科学生ニ対シ中等科長ヨリ訓示アリ
第五時限終了後正堂ニ於テ全学生ニ院長ノ訓示アリ
- 十二月九日 火曜日
本日午前十時ヨリ宮中三殿ニ英米戦争布告御報告ノ御親拝行ハセラル、ニ付同時刻ヲ期シ全院一同其位置ノマ、遥拝セリ
- 十二月十日 水曜日
詔書奉読式を午前十一時三十分正堂に於て行ふ右終りて院長より戦況につき御話あり、右につき第五時限の始業を一時二十分とす（かなの表記は原文通り）

10日の院長講話については、高等科の学生寮だった昭和寮に在籍していた学生が、概要を次のように記録している。

先ヅ各職分ヲ尽スノ覚悟ヲ徹底セシムルニハ之ヲ我ガ身ニ引当ツベク、学生ニトリテハ教室ハ戦場ト心得、学問ノ敵前上陸ヲナスベキヲ訓ヘラレ、次ニ米、英ニ対スル開戦ニ至ル迄ノ外交経過ヲ述ベラレ、英米ノ我国ヲ見クビリシガ茲ニ至レル一因ナルコト、八日開戦劈頭ノ成功ハ機密保持、天候及敵艦集結等ノ謂ハバ天祐トモイフベキ事情モ

亦之ニ与レルコト、前途尚多難ナルベキ故、当面ノ事件ニ一喜一憂スルコトナク、冷静堅忍タルベキコトヲ説カレタリ（『昭和寮日誌』）。

資料をみる限り山梨は戦況を解説しながらも、学生生徒に戦意高揚を促すような発言を行っていない。『小ざくら』31号には開戦と緒戦の勝利に興奮する生徒の作文が多く掲載されているが、山梨の講話は、そうした興奮を抑制する意図があったようにも思われる。



「昭和寮日誌」1941年12月10日

2. 開戦と教員・学生

他方で、開戦の喜びを露わにした教員もいた。『輔仁会雑誌』168号（1942年12月発行）は、当時高等科に在学していた平岡公威（三島由紀夫）が編集を担当し、巻頭には山本修・清水文雄両教授の寄稿が掲載された。清水は国文学を担当して、平岡とは子弟関係にあったことでも知られる。清水文雄「『十二月八日』以後」は、冒頭に「あな尊/今日の尊さや/古もはれ/古もかくや有りけむや/今日の尊さ/あはれそこよしや/今日の尊さ」という催馬楽（さいばら・古代の歌謡）の歌詞を掲げ次のように続けた。

昭和十六年十二月八日、わが歴史の志大いに展
くる日の深更、この神国に生れあはせたことの歡
びに胸うち轟かしつつ筆をとる。

今夕刻奥村情報局次長の熾烈火を吐く愛国の熱
弁が終り、強い感動になほ血を湧き立たせてある
この胸の中に、すぐつづいて万葉の古歌の朗詠が
次々と二首流れ込んできた。雅やかにも亦力強い
調べがこのやうな状態にある心の中に実に自然に
入ってきた。それは又実に驚くべきことであつた。

み民われ生ける験あり天地のさかゆる時にあへ
らく念へば

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯とい
で立つ吾は

この千余年昔の民草の言の葉が、今日ほど生き
生きとわが身に蘇つたことはなかつた。人口に
膾炙しつづけてきたこれらの歌ではあるが、実に
新しい、瑞々しい。私はこの実感を世にも有難い
ものとして、大事に、大事にしてゆかう。

開戦に興奮し喜びを記した文化人やジャーナリス
トの事例は多い。ただし清水は教師であり、自らの
学識によって戦争を美化し学生生徒に影響を与えた
責任は免れないであろう。とはいえ『輔仁会雑誌』
同号に掲載された学生の作品には戦意高揚をはかる
ものは見受けられず、4段4頁にわたる編集後記を記
した平岡公威も、山本と清水の寄稿に賞賛を送るも
の、自らの創作では戦争を賛美する叙述を行って
いない。

3. 米国文化への親近感

1941（昭和16）年4月に開催された輔仁会大会では、
学生有志の「ジャージングバンド」によるハワイア
ン演奏が行われた。開戦直前までハワイアンやジャ
ズ、ハリウッド映画などのアメリカ文化は日本でも
広く受容されており、学習院の学生にも愛好者が多
かったようだ。後にジャズ評論家として活躍した瀬
川昌久は、平岡公威と初等科以来の同級で1943（昭
和18）年9月に学習院高等科を卒業し、東大進学後
学徒出陣も経験しているが、中等科在学中からジャ
ズに親しんでいたという。

日米戦争が勃発した1941（昭和16）年12月8日
の夜、私は我が家でアメリカン・ジャズのレコー
ドを聴いていた。両親が、ラジオを聴きながら「今
日だけはジャズをかけるのはやめた方がよい」と
心配そうに言うので、私は2階に上がって押し入
れの中でレコードを聴いた覚えがある。（『戦中に
共通する反知性—敗戦から71年の今』『ジャズで
踊って 舶来音楽芸能史 完全版』所収、草思社文
庫 2023年）

瀬川は、「アメリカのこんなに進んだ映画や音楽
を、ぜひ日本も吸収して優れた大衆音楽や大衆映画
を作らなきゃダメだと、わたしも何となく思い始め
るようになって、そうした気持ちは戦前から強くあ
りました。……もう十五、六くらいから、何かそう
いう気持ちがありました」と蓮實重彦との対談のな
かで回想している。（『アメリカから遠く離れて』河
出書房新社 2020年）

現在学習院大学東洋文化研究所一般教育プロジェ
クト「戦時期の学習院と東アジア」が進められ、戦
時期の学習院で学生生活を送った方々の資料の調査
が行われた。収集された資料や写真から浮かび上
がるのは、戦時下にあってもジャズやクラシック音楽、
映画、スポーツなどに親しみ、日々の生活を楽しむ
学生たちの姿である。調査報告書は2025年に刊行予
定で、改めて紹介する機会をもちたい。

引き継がれた知のバトン

～南極観測隊を支えたひと

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

1. 荒川研究室で出会った「南極」

荒川一郎先生¹⁾から2024年6月、資料をご寄贈いただいた。それらのうち、「南極行 1956-57」の文字が表に見える8ミリの映像フィルム缶と、「南極観測隊」と鉛筆で表書きされた小箱に目を引かれた。木下是雄教授から譲り受けたとのことである。南極、南極観測隊。これまで学習院アーカイブズでは扱ったことのないワードが含まれる資料に高鳴る胸を抑えながら、筆者は少しずつ調査を進めた。本稿では、この「南極」フィルムについて現在までに判明したことの概要を紹介する。

2. 木下是雄と南極

木下是雄（生年：1917年～2014年。学習院大学名誉教授。6代学長。図1）は物理学者であり、1949（昭和24）年から1988年までの39年間、学習院大学で研究・教育の指導にあたった。他方、登山やスキーにも通じており、東大山の会（東京大学スキー山岳部OBの会）のメンバーでもあった。



図1 左から西堀栄三郎、木下是雄、永田武、渡辺兵力（永田武アルバム「1次訓練」国立極地研究所蔵）

木下と南極との関わりは、1957（昭和32）年7月から1958年12月までの国際地球観測年ⁱⁱ⁾へ日本の参加が1955年11月に閣議決定され、南極地域観測事業が開始される前から始まっていた。同年10月、日本学術会議総会において、観測調査上の諸事項の企画立案に携わる南極特別委員会（略称「南特委」）の

設置が議決されると、木下は装備委員に任命された。これより、1973年の国立極地研究所設立により南極研究連絡委員会へ改組されるまで委員として携わることになる。

3. フィルム①「南極行 1956-57」：アメリカ南極観測隊オブザーバー参加

3本立て全編カラー、計1時間25分程度のフィルムは、木下が1956（昭和31）年11月3日から1957年2月にかけてアメリカ南極観測隊にオブザーバーとして参加した際の映像である（図2）。原本である。



図2 「南極行 1956-57」フィルム。イーストマン・コダック社製

木下の南極行きは、同年6月末に南極地域における各国基地および観測隊の相互協力や国際親善の推進のため、アメリカがオブザーバー（交換科学者）の交換を日本に申し入れたことに端を発する。11月8日に日本の第1次南極地域観測隊（「南極観測隊」とも呼ばれる）の出発を控えるなか、南特委の推薦により、木下の派遣が決定されたのである（「92 交換科学者（1）」、国立極地研究所蔵）。

映像は、木下が乗船したアメリカ海軍砕氷船スタットン・アイランドがシアトル港を出航する場面から始まる。主に次のような映像が収められている。

船の中の鉄梯子から降りて画面に向かって微笑む木下の姿／途中で貨物船ワイアンドットに合流／スタットン・アイランドより偵察ヘリコプターが飛び立つ前にパイロットと談笑する木下／氷上のペンギ

ン／ウェッデル海での接岸地点を探すため、砕氷しながら進むスタットン・アイランドと氷の様相／海中生物の採取／接岸後、スキー板を持って下船する木下／積み荷を降ろす船員／日本人と思われる2名の姿ⁱⁱⁱ⁾／テント前に掲げられた海軍の旗「IF IT CAN BE DONE WE CAN DO IT」／基地設営の様子／出帆。越冬隊の別れと陸から遠ざかる海の様子など。

4. フィルム②「南極観測隊」：南極観測隊予備訓練の指導員として

1本8分19秒のフィルム②も原本である（図3）。前半は、日本国内の雪山や木造建物の外観から始まり、室内で食事をしながら談笑する人々（約8名）の姿が映し出されている。そこには木下の姿も確認できる。後半は、十和田湖国立公園や乙女の像を散策する一行の様子や、施設敷地内で観光バスの前で集合し、談笑する様子が映し出されている。



図3 「南極観測隊」フィルム。白黒とカラーのフィルムが継ぎ合わされている。

文献及び資料調査の結果、フィルム②の前半については、1956（昭和31）年3月20日から26日まで長野県乗鞍岳で行われた南極観測隊予備訓練の一幕である可能性のあることがわかった。

乗鞍岳の予備訓練の目的は、「観測隊員候補者の積雪・寒冷地域における行動訓練と隊員相互間の親睦。隊としての第一回の共同的行動訓練^{iv)}」であった。隊長の永田武、副隊長兼越冬隊長の西堀栄三郎含む33名あるいはそれ以上の参加者だった。東大山の会会員が期間中の行動訓練の中心を担った。木下は東大山の会会員として隊員に設営技術を指導するポジションだったようである（第1次観測予備訓練全体のうち、計3回参加^{v)}）。ちなみに、図1はこの時の一幕ではないかと考えられる。

フィルム内の人物は、現時点で木下他、立見辰雄、村山雅美、渡辺兵力であることを特定した。この3名は第1次南極地域観測隊員であり、立見と村山は、のちの隊長経験者でもある。村山は映画『南極物語』

の監修でも知られる。

5. 渡されたバトンの意味

全フィルム4本は、1956年3月から翌年2月に至る約1年間の記録と考えられる。この短い間、木下は第1次南極地域観測隊の訓練に携わり、さらには自らも日本の交換科学者第一号として、彼らと同時期に昭和基地から約2,500キロ離れたアメリカの基地で過ごしていた。フィルムの制作者は未だ特定できていないが、大砲も装備するアメリカ海軍砕氷船の威力、接岸や基地設営のアメリカの動きをつぶさに捉えているのは、木下の目線ではなかろうか。知ることへの探求心に溢れた充実した様子と、国内予備訓練で隊員たちと語らう気さくな姿は、日本の当時の様相や、知的好奇心の大切さを筆者たちに教えてくれているように思う。

木下は、のちに学習院輔仁会大学支部山岳部部长を務めた（1959～1971年）。山岳部員を南極地域観測隊として輩出している^{vi)}。

フィルムは、木下から荒川先生に引き継がれた。その知のバトンはアーカイブズに渡された。荒川先生より、「木下先生が退職される時、色々なものを「あとは荒川に任す」という様なお気持ちだったのでしょ」とメッセージをいただいた。アーカイブズへ渡されたバトンをしっかりと離さずにいたいと思う。

なお、フィルムについては現在調査・整理中のため、まだ公開できる状態ではない。準備が整ったら、改めてご紹介する機会をもちたい。

【謝辞】

資料をご寄贈いただいた荒川一郎先生、南極関係資料について豊富な情報をお教えいただいた大坂亜紀子様（国立極地研究所）、フィルム調査・デジタル化をお引き受けいただいた亀谷篤志様（株式会社東京光音）に厚く御礼申し上げます。

- i 学習院大学名誉教授。13代学長。学習院輔仁会大学支部山岳部部长（1987年～2020年）。
- ii 国際地球観測年：International Geophysical Year (IGY)。国際協力により地球の物理学的調査を組織的に実施する事業であり、64カ国が参加した。南極地域は最も重要な観測の対象とされ、日本を含め11カ国が参加した（参考：文部省、『南極六年史』、1963年3月）。
- iii アメリカ国立公文書館デジタル・アーカイブにおいて公開されている「スタットン・アイランド航海日誌（LOG BOOK）」（1956年、1957年）に、木下と日本人2名（同行した新聞記者）の乗船、帰路のためのワイアンドットへの移乗記録を確認できる。
- iv 「545 1次、訓練」（国立極地研究所蔵）
- v 「Ⅷ 南極地域観測隊各次訓練試験項目一覧」『南極六年史』、216-222。
- vi 学習院輔仁会山岳部・学習院山桜会、「いざや登らん—山桜4号」、1993年。

主な活動（2024年7月～2025年1月）

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（23部署）
- ③各部署に保管されている評価選別済保存文書の引取（6部署）・移管（5部署）
- ④文書管理に関する支援

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

- ①大学図書館未整理資料
- ②幼稚園事務室資料
- ③女子大学収蔵外部倉庫資料の見学（11月）
- ④初等科所蔵資料（12月）

◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③劣化資料に対する保存修復
- ④資料クリーニング

◆資料等のデジタル化

- ①雑件録（昭和6年～昭和22年）の件名目録作成
- ②「式事録」（昭和10年代分）のデジタル化および補修

◆資料受入れ（受贈）

- ①木下是雄南極観測関係資料
- ②山岳部関係資料
- ③卒業生写真、巻物、卒業証書等
- ④沼津游泳関係資料
- ⑤川内優輝箱根駅伝関係資料



実際使用したシューズ（2007年）とゼッケン（2007、2009年）

◆講演会、教育・広報支援等

- ①文学部史学科専門科目「アーカイブズ学演習」への協力
- ②文学部教育学科専門科目「教育学実践演習」への協力
- ③総合基礎科目「記録保存と現代」への協力
- ④東洋文化研究所一般教育プロジェクト「戦時期の学習院と東アジア」への協力
- ⑤大学計算機センター開設50周年記念誌への協力
- ⑥ベトナム共産党中央事務所訪問団への見学対応
- ⑦大学開学75周年記念式典（9月28日）への協力
- ⑧高大連携授業「博物館を知ろう」への協力
- ⑨大学開設75周年特設サイトへの協力
- ⑩大学保証人懇談会への協力
- ⑪大学史料館（霞会館記念学習院ミュージアム）への協力
- ⑫学習院VISION150「学習院アイデンティティの涵養と発信によるブランドの向上」（総合企画部企画課）への支援

〈「今」の学習院をお届けします〉



都心にありながら四季折々の風景が楽しめるのも学習院の魅力の一つです。秋から冬にかけて、毎日色とりどりの鮮やかな紅葉が楽しめます。（2024年12月11日 学習院アーカイブズ職員撮影）
奥に見える建物は新旧大学図書館で

す。旧図書館（左）は2025年3月14日（金）に霞会館記念学習院ミュージアムとしてリニューアルオープンいたします。

学習院アーカイブズ・ニュースレター第24号 2025（令和7）年2月17日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285（直通）

事務室 北別館

<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html>